

## 巻頭言

## ◆ 人とのつながりからうまれる今、そして未来！

築山 泰典（日本野外教育学会理事・福岡大学）

野外教育との出会いは人との出会いであった。私は、大学へはあまり行かず、とても不真面目な学生生活を過ごしていた。そんな大学2年生後期、野外教育を担当される先生が大学に着任され、その先生の出会いこそが野外教育の出会いであった。

先生に誘われて夏には初めて野外教育としてのキャンプに関わることができ、真面目に大学に通う私に変化していた。そして、12月には民間の放送局が主催する、スキーキャンプに、スタッフとして関わる機会を得た。そこでは、遠藤先生は「マメさん」であることを知り、アラレ校長(佐々木豊志氏)や、ボンバー(高橋一美氏)等、野外教育の分野で活躍されている「大人」の方々が連携しながら運営されるキャンプの世界に魅了された。そして、何よりも、関東で野外教育を学ぶバク(岡村泰斗氏)や、タカ(高瀬宏樹氏)との出会いが刺激になり、今でも大きな財産になっている。

その後、1998年6月日本野外教育学会第1回大会が開催され、多くの野外教育に関わる方々と出会い、また、バクやタカなどの仲間とも再会することが出来た。その後今日に至るまで、キャンプの実践や、講習会等で関わりながら、彼らから多くのことを学ばせてもらっている。出会った年齢から考えると、ちょうど人生の半分の期間の関わりとなっている。

2006年より、福岡大学で野外教育を担当するようになり、今年で7年目を迎えた。その中で、自身がそうであったように、「野外教育を通じて真面目になる学生」を求めている。そして、そんな彼らにも、多様な野外教育者との出会いを提供したいと考えている。そのため、私が指導者として関わる対外的な指導実践場面では、学生も一緒に参画できることが、最優先の条件となっている。また、2年前からは、九州での野外教育関係者が集う機会としての



「九州キャンプミーティング」も本学会の支援を受けながら実施している。私自身を育てて頂いた、過去の体験を、今にアレンジさせながら学生へ提供することが、大切な使命だと感じているからである。

今年、沖縄で開催された日本野外教育学会第15回大会では、実に北海道から沖縄までの野外教育を学ぶ学生たちの出会いと交流の場と発展していた。携帯電話を巧みに操る彼らである。きっと、Facebook等のソーシャルネットワークを用いて、継続的な交流が図られているものとする。しかし、仮想現実での関わりだけでなく、野外教育らしく実体験を通じた交流、キャンプの実践へと発展することを、期待してしまう。そして、そのようなつながりから、これからの日本の野外教育の発展を目指してほしいと心から願っている。

来年は、私の野外教育との出会いの場であった、京都教育大学で学会大会が開催される予定となっている。学生の頃、出会った「野外教育の大人達」の当時の年齢を既に超えている。その時感じた大人感を今の若い世代の学生達に、私は伝えることが出来ているか甚だ疑問も残る。しかしながら、様々な形で学会運営に関わりながら、福岡の地から微力ながら尽力させていただきたいと考えている。

## 新会長 就任ご挨拶

飯田 稔 (びわこ成蹊スポーツ大学 学長)

今年7月に沖縄で開催された日本野外教育学会総会において、2012年度から3年間の任期で会長としてご推挙いただき光栄に思うとともに、責任の重さを感じています。

本学会創設以来15年にわたって理事長として学会の運営に携わってまいりました。会則によれば、理事長の任務は「理事会を代表し、会務を執行することであり、理事の意見を取りまとめ、方向づけをし、具体的な事業を展開するという強いリーダーシップが求められています。一方会長は、「本会を代表する」と書かれてあるとおり、学会の顔として社会に対する説明責任を果たすことが求められていると考えられます。

最近の野外教育の動向として、自然体験活動議員連盟による「自然体験活動推進法」(仮称)の立法化の準備や文科省の中央教育審議会・スポーツ青少年分科会が「青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会」を設置し、審議が重ねられています。これらの成果や提言が待たれます。同時に学会として社会に対して何をなすべきか、会員の皆さまとともに追求し、野外教育の発展に繋げてゆく所存です。

ご支援、ご協力をお願いいたします。



## 新理事長 就任ご挨拶

星野 敏男 (明治大学)

このたび実施されました、第7期理事選出選挙の結果を受けて、学会理事会も新体制となり、それとともに新理事長に推薦されました。第15回沖縄大会以降は、第7期の新役員体制で学会運営を行うこととなります。新理事会として学会運営の舵取り役を担うこととなり、これまで以上に肩の荷の重さをひしひしと感じております。飯田会長・永吉副会長はじめ、井村・石田副理事長、金子、平野、坂本、小森各委員会委員長、新理事の皆さまと協議し、学会員の皆さまの意見を伺いながら全体の運営にあたっていきたいと思っています。今後の学会大会運営や各委員会が主体となる事業運営に対しても、どうぞ皆さまの積極的ご協力をよろしくお願い致します。

さて、日本野外教育学会も発足後、既に15年が経過いたしました。これを機に、これまでの学会としての研究成果や実績を改めて見直し、その上で学会としての今後の方向性について考えていきたいと思っております。また、これまでの課題や改革すべき点等を丁寧に洗い出し、事務局運営や学会大会の在り方、研究活動、研究投稿の活性化などについて再検討するとともに、野外教育そのものについて、もう一度原点から考えていきたいと思っております。

これまでの15年間、学会事務局は筑波大学が担ってこられました。しかし、年々、事務作業量が一極集中化し、筑波大学の先生方には、長年、多大なご負担を強いることとなってまいりました。新体制では、事務局の本部機能を筑波大学に置きながらも、可能な限り学会運営作業を分散、分担したいと考えています。今期は、事務局サテライトを明治大学におくことで、筑波大学と連携をとりながら理事会運営や企画調整等を行い、また、ニュースレター、学会誌の編集は従来通り各委員会が担いますが、可能であれば、発送業務等はアウトソーシング化を図りたいと考えております。また、学会大会も、可能であれば3年ほど先までの開催場所をあらかじめ決めておきたいと考えています。学会全体の活性化のため、関連学会や民間団体との連携や支部での事業企画実施はもとより、関連・共通テーマの下に学会員が集れるような仕組みがあっても良いかと思っております。

皆さまの選挙によって選出されました各理事には、実行部隊としての役割が大いに期待されていると思われまます。私たち新理事、役員一同、それを肝に銘じ、新しい野外教育学会をめざして、皆さまと相談しながら、総務、編集、企画、広報の各委員会が一体となって前に進んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。



## 日本野外教育学会第15回大会 報告

### ◆ 日本野外教育学会第15回大会を終えて

大会実行委員長 柳 敏晴(日本野外教育学会理事・名桜大学)

「メンソーレ沖縄！」沖縄の青い海と空、そして、ゆいまーの気持ちで皆様を歓迎しました第15回学会大会を沖縄で開催できたことを嬉しく思っています。是非、沖縄を体感していただきたいとウチナンチュ全員が願った大会でした。

沖縄県、沖縄県教育委員会、会場を提供いただきました沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学、その他多くの皆様のご協力があったからだと心より感謝申し上げます。日本野外教育学会は、当初実践者と研究者の共同の場、コラボレートする機会、共に学び合う学会にしようとしていました。第15回学会大会で、再度当初の目的を思い返したいと考えました。また、沖縄の自然が持つ力の再発見を共にできればと考え、プレワークショップ：「実践の成果をまとめるには」及びエクスカーションにおいて、テーマの「美ら島・沖縄を感じ、未来の教育を考える」に沿った幾つかのプログラムを企画いたしました。

沖縄の海は美しく、透明感溢れる青は光により様々に変化します。海は、この島の生活と文化に絶えず影響を与えてきました。琉球には、ニライ・カナイの世界観があります。海の彼方には神々が住む理想郷、ニライ・カナイがあり、幸福と豊穡はそこから来ると信じられています。祈りの心は所作となり、祈りの言葉は歌となり、芸能へと発展しました。沖縄の人々は、自然から学び、自然と共に生きてきました。野外教育が、未来の教育に何らかの示唆を与えるものと考えました。

講演とシンポジウムは、沖縄の自然、文化、歴史、伝統、ツーリズム、自然学校、そして地域をキーワードに、内容を詰めました。今泉さんの写真を通しシンポジウム全体の方向づけをする訴え、田中さんの歌を通した癒し、玉代勢さんの滲み出る優しさ、島袋さんの淡々とした地域への誇り、コーディネーター小林さんの素晴らしい導入と導き、コメンテーター大石さんの謙虚で筋の通ったコメント、それぞれが沖縄らしく素朴で、また心惹かれるものでした。言葉では十分に表せませんが、平田大ーさんの基調講演を受け、沖縄で学会を開催した意図を十分に表現できたものと考えます。今までの学会大会とは一味違う導入ができたものと考えます。日本環境教育学会との連携プログラムも取り入れました。また、国際交流小委員会の企画により、JOES International Research Forum(IRF)を開催し、北米、アジアからの参加があり、今回の企画が次回以降広がってくれればと願っています。

本土復帰から40年の年に、県民が願っている「基地のない平和な沖縄」はまだ実現していませんが、沖縄の現実を体感していただけたでしょうか？世界一危険な普天間基地、安全でないオスプレイの配備等まだまだ構造的な差別が続く沖縄です。人々が安心して暮らせる豊かな沖縄をどう実現すればよいのかを、生命を大切に考える野外教育学会の皆様と共に問い続けたいと思います。今後とも、未来を担う子どもたちのために、沖縄の自然を活用した野外教育を進めていきましょう。またご一緒できる時を楽しみにしています。皆様のご活躍とご健勝をお祈りいたします。



### 学会プレ企画

#### ◆ 野外教育セミナー 「学校における自然体験活動の展開」

講演：中野 友博（びわこ成蹊スポーツ大学）

報告：三田井 裕（琉球大学教育学部附属小学校） 福島 誠司（沖縄国際ユースホテル）

相澤 敬二（国立沖縄青少年交流の家）

今回開催の沖縄大会では、学校における自然体験活動の展開をより充実させることを目的に、沖縄県内の教諭を主な対象として野外教育セミナーを開催し、自然体験活動の意義や実践事例についての理解を深める機会としました。当日、セミナー会場へどれくらいの参加があるか心配でしたが、予想以上の参加人数の中、講演、実践報告、指導者養成事業の紹介が行われました。

セミナー最初の中野友博氏による講演「学校における自然体験活動の展開」では、体験活動の大切さ、長期の自然体験活動の重要性、推進の課題などについてわかりやすく解説していただきました。

実践報告では、三田井裕氏が、3年生から6年生までの発達段階に応じた学校での取り組みを紹介し、また、福島誠司氏は、学校との連携事業として国場川、久茂地川、漫湖をフィールドに実施しているカヌー教室や震災後始まった福島の子ども達対象の支援事業について紹介しました。講演及び取り組み説明後、それぞれに対するの質問や提案も出て、暑い沖縄での「熱い思いを秘めた」学会スタートとなりました。（相澤敬二）



## ◆ プレワークショップ 「実践の成果をまとめよう！」

講師：伊原 久美子（大阪体育大学） 瀧 直也（淑徳大学）

このワークショップでは、プログラムの成果をまとめるために、調査の準備から成果の発表までを実践し、その手法について理解していただくというねらいのもと以下のように進めていきました。

2種類の調査方法を実践し、まとめ方や分析の仕方についてグループワークですすめました。調査方法は、A:尺度を用いた事前事後の量的調査と、B:自由記述アンケートを用いた質的調査の2種類を行いました。

Aの量的調査では「IKR 評定用紙」を用いて、実際のアンケートのとり方から入力、そしてデータ解析まで行いました。データ分析については、国立青少年教育振興機構発行の「事業評価に使える!『生きる力』の測定・分析ツール」の分析ソフトを用いて行いました。Bの質的研究では、「低学年児童におけるキャンプの効果」というテーマで付箋紙に記入し、グループごとにKJ法を用いて分類し、分析を行いました。また、テーマの設定の仕方や調査依頼の方法等、調査に至るまでの準備についてや、調査結果のまとめ及び発表方法、調査報告書の作成についても詳しく紹介し、新たに調査を行う人にとって、ひとつのきっかけとなる機会をもつことができました。(瀧直也)

◆ 国際交流小委員会企画ワークショップ 「Controversial Issues In Adventure Programming」  
(邦題) 冒険プログラムにおいてまだ答えの出ていない問題

Presenters: Mark Wagstaff, Ed.D. &amp; Taito Okamura, Ph.D.

マーク・ワグスタフ氏が共同執筆する著書「Controversial Issues in Adventure Education: A Critical Examination」を題材に、冒険教育プログラムの研究・実践において話し合われました。例えば、「指導者資格は必要か」などのまだ明確な回答の得られていない問題についての検討です。このワークショップは、参加者同士がディベートを通じて課題について考える参加体験型として実施されました。(国立赤城青少年交流の家 高瀬宏樹)

## 基調講演

## 生きる力は感動から

平田 大一（沖縄県文化観光スポーツ部長）

平田大一氏は、1968年沖縄県の離島小浜島の生まれで、仲井真県政2期目の目玉として民間から登用された期待の星です。人が変わらないと組織は変わらねと言われる言葉が印象的でした。2000年からうるま市の活性化のため、地域の子供達による「現代版組踊、肝高の阿麻和利」を続けられ、沖縄県知事より「第1回島おこし奨励賞」を受賞されました。2005年には「現代版組踊、レキオス」、2006年「第4回世界のウチナーンチュウ大会閉会式アトラクション」等の脚本・演出を手がけられた演出家、プロデューサーでもあります。

基調講演では、初め意欲・自信がなかった子供達が、平田さんの熱心な指導熱意で目覚め、苦しい稽古を楽しいものにしてながら、また仲間を増やしながら乗り越え、地域での発表会を、地域の人達皆が観劇し、踊り手も含め感動涙し、そして地域が活性化していく様子を子供達の組踊のDVDから見ることができました。私達も、また感動を覚えました。

平田さんは、視点は郷土に持ち視野は世界に広げ、一流の島人（シマンチュ）が一流の国際人であると言われ、沖縄文化のカリキュラム化を考えていると言います。尽きるころは、外に向けてではなく内に向けて島人がどうするかであると言われていました。沖縄独自のムーブメントの創出、ブランド力の向上、スタイルの確立を目指す中で、交流人口が増え、観光が成り立つと考えられています。感動産業クラスターの方程式は、沖縄独自の文化（食、芸能、しまくとぅば（島言葉）、スポーツ、年中行事等の「暮らし」が、「観光」を触媒として「文化立県⇔感動立県」になり、文化力の向上、文化意識の底上げが感動立県への道と言われていました。「誇り政策」を夢想していて、それは琉球言語法の制定、時差の設定、パスポートと入域税、沖縄文化のカリキュラム化等です。

文化観光スポーツ部では、離島、文化、スポーツ、ルーツ、プロモーションの五つの柱と、「フォーシーズン・オンシーズン・おきなわ」「スポーツアイランド・おきなわ」「ストレスフリー・アイランド・沖縄」「ダウン（Dawn、夜明け前、兆し）ウチナー文化」「万国津梁ウチナー基金」を五つの言葉に、絞り込んでいます。平成25年には感動立県（観光立県×文化・スポーツ立県）宣言をしたいと語られました。文化観光スポーツ部は、沖縄全体をステージとして捉え、ストーリー（戦略）を描き、テーマソング（理念）を創り、キャストイング（役割分担）して、プロデュース（情報発信）します。この島の魅力を最大限に発信表現する「沖縄県総合プロデューサー」チーム、沖縄全県版演出家のようなものと考えられています。笛を吹かれ、太鼓を叩き、歌を唄い、想いを伝えていく平田さんは、教育者であると感じました。

今学会大会のテーマである「美ら島・沖縄を感じ、未来の教育を考える」のテーマが目指す、「教育に感動が求められている、観光にも感動が求められている、文化・スポーツは感動である」というメッセージは、沖縄の未来に、日本の未来に、野外教育の未来に、教育の未来に、ある方向性を示してくれたと考えたのは私だけでしょうか？（実行委員長 柳敏晴）



[以上の詳細は、次号の野外教育研究に掲載予定です]

## シンポジウム

### 美ら島・沖縄を感じ、未来の教育を考える

パネリスト	今泉 真也 (写真家・映像作家)	田中美也子 (NPO法人うていーらみや)
	島袋 裕也 (やんばる自然塾)	玉代勢 卓 (じんぶん学校)
コメンテーター	大石 康彦 (森林総合研究所多摩森林科学園)	
コーディネーター	小林 政文 (がじゅまる自然学校)	

沖縄県は年間 550 万人の観光客が訪れ、その 50% 近くが海水浴やダイビング、マリンスポーツなど野外での活動を体験しています。また、そのうちの約 1 割が修学旅行生 45 万人であり、その学校の多くも自然体験や農業体験、マリンスポーツなど、野外での活動を修学旅行のメニューに取り入れています<sup>(※)</sup>。これらからも沖縄は観光と野外教育が密接である特殊なエリアであることがいえるかと思えます。また、抱える様々な問題も複雑であり、それらの解決のために野外教育、未来の教育のあり方に期待をしている風土があるのかもしれない。

今回のシンポジウムは「美ら島・沖縄を感じ、未来の教育を考える」をテーマに、観光と野外教育の活動を実践している様々なメンバーで進められました。

沖縄の普段何気ない風景、沖縄の特徴的かつ美しい自然。画面の中に吸い込まれてしまいそうな動画や写真が手製の巨大なスクリーンに映し出され、シンポジウムはスタートしました。映像作家の今泉真也さんからの強いメッセージのようなものを感じ取ることができましたが、

皆様はどんなふうには感じましたか。沖縄の美しい自然、昔ながらの暮らしも現代化の波に追われています。集落に腰を下ろし、常に見守ってきたからこそ語ることでできる小さな変化、その変化への問題提起。それらもじんぶん学校の活動なのかもしれないと、玉代勢卓さんは語ってくれました。実施しているのは主に沖縄の昔の集落での暮らしを体験できるプログラム。ちょっと昔の不便な体験から参加者は数多くを学んでいます。沖縄県東村といえばマングローブカヤック。12 年前から地元を根を下ろし活動されてきたやんばる自然塾ですが、始まりのきっかけは地域おこしであったと島袋裕也さんは語ってくれました。地元の自然を活かし、大切にしていける活動が今は沖縄でも代表的な野外教育組織となっています。自然への恐れや畏敬の念。わらべ歌にはそんな気持ちが込められていると NPO 法人うていーらみやの田中美也子さんは歌と共に語ってくれました。しかし、今の暮らしの中にはそのような気持ちが少なくなっているのかもしれない。森林総合研究所の大石康彦さんは、日本中で開発の波が引こうとしている中、開発が遅れた故に残っている豊かな自然、その自然と共に生きる人、精神性、文化が沖縄にはあり、まさにその波打ち際の沖縄は時代の最先端に行く可能性があるとして示唆されました。

我々は様々な場面や活動、日常、数多くの問題など、沖縄の現状について皆さんに発信しました。受け取った皆様がどのように感じ、どのように参考にさせていただいたかはわかりませんが、我々は野外教育の持つ可能性、未来のあり方に期待しています。

(小林政文)

<sup>※</sup>文化観光スポーツ部観光政策課平成 23 年暫定版観光要覧

<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/report/documents/h23yoran.pdf>

[以上の詳細は、次号の野外教育研究に掲載予定です]



## International Research Forum

International Research Forum (IRF) は、日本野外教育学会国際交流小委員会が英語による研究・実践発表の機会として企画したものです。当日、50 名ほどの方々が参加してくださいました。

海外からの大会参加者を受け入れること、日本野外教育学会会員が、海外の関連諸学会で発表できるスキルを獲得できる機会とすることが目的でしたが、おおよその目的は達成されたように思います。

一方で、まだまだ英語に対するハードルが高いのか、「タイトルに興味を持って参加したけれど、内容が全くわからなかった」という声もありました。学会大会参加者が内容を聞きやすくするのが良いのか、それとも英語のスキルを伸ばしていくのを期待するのか、悩ましいところですが、今後検討していきたいと思っています。

この IRF プログラム以外にも、海外参加者との交流が場面場面で見られました。しかし、今回のみの企画に留まらず、引き続きさらなる国際関連プログラムの進展を視野にいれていく必要があります。例えば「お互いにとってより建設的な交流とするためにどのように仕掛けていくか」、「海外参加者も参加したいと思える学会大会をどう構成していくか」など、国際交流小委員会で出た課題について、今後は企画委員会が引き継ぎ検討していくことになります。

(高瀬宏樹)

## 参加者の感想

●シンポジウムを聞き終えて数日は、考えがまとまらないでいたが、森を歩きながらふと、「キャンプで育てられるもの、育てたいものは“想像力”と“行動力”だな」と思った。自然のなかで、風にふかれ、太陽を浴び、雨や嵐にうたれ、木々の息づかいに身をまかせながら、神様や妖精みたいなものを感じられたら、素朴ながらも心豊かな生き方を探し始めるだろう。目に見えない事象の背景やつながりを想像できるようになり、物事の価値をきちんと見極められるようになる。そして、その価値観を行動に移していく力も必要だが、それは、自分で成し遂げられた！という経験を積むことで育つ。そうだ、キャンプにはその両方のチャンスがある。やっぱりキャンプは素晴らしい、そう思った。キャンプは生き方そのものを分かち合う場。だから、毎日の生活の中でも、感じる心を曇らせず、欲張らず、できることをちゃんとやろう、と意気込みを新たにしたら。素晴らしいお話をありがとうございました。  
(明治大学兼任講師 針ヶ谷雅子)

●今回初めて大会に参加させていただき、それまで悩んでいた“自然体験をする子どもたちを対象とした研究方法”について、さまざまな示唆が与えられた。2日目の研究発表やポスター発表のみの参加であったが、野外活動に参加した子どもたちの記録の取り方についてさまざまなアプローチがみられた。ビデオ記録や参与観察法による分析、また、子どもたちのエピソード収集による変容の分析結果をデータとして示し、言語化して野外教育の有効性を伝えることによって、野外教育がますます重要な教育手段の一つとして一般化することが期待される。野外、特に自然環境の中で体験をすることに対し、環境教育の面から評価する研究にウェイトを置いてきたが、心身機能の面からも評価する糸口を、今回の大会でつかめたように思う。特に、障がいをもつ子どもたちにとっては、自然環境の中で過ごすことが自己実現の手段となり、また自己効力感をもたらし、生活スキルのさらなる向上につながるものが考えられる。このように野外教育は、さまざまな教育上の有効性と可能性を含んでいる。子どもたちにとっては学校生活が日常の環境であり、それゆえに生活の中で一番大きなウェイトを占める学校教育と野外教育との関係について、さらなる整理が必要であるように思われた。また、環境教育研究との共通性と特異性についても、考えさせられた1日であった。  
(東京学芸大学連合大学院 廣瀬彩奈)

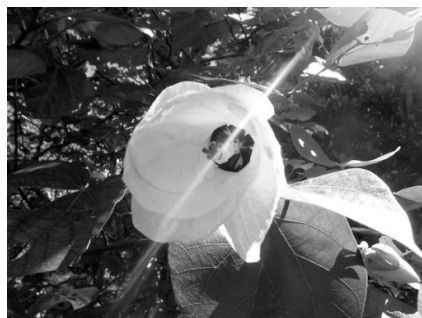
●学会初日に参加した国際交流小委員会企画のワークショップでは、冒険教育プログラムについてのディベートを通して冒険教育の今後の可能性について考えることができ、とても視野が広がりました。北米で行っている冒険教育プログラムの最新情報の中には、日本において実践できそうなものもあり、それらを参考にしてどう取り入れていくのかが課題であると感じました。2時間では物足りないほどの熱い意見交換をすることができ、参加してとても良かったです。また、シンポジウムや研究発表において、沖縄県内・県外、大学生から社会人の実践者の方々のお話から、野外教育・環境教育の教育的効果や魅力を再確認することができました。発表者の方々から得た沢山の学びや刺激を、今後の活力にしていきたいです。私は今回が初めての学会参加でしたが、様々なプログラムや懇親会などを通して、新たな出逢いと繋がりを築くことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。改めて、大会実行委員の皆様へ感謝申し上げます。ありがとうございました。(名桜大学人間健康学部 横田望)

## エクスカージョン

### ◆ A コース【とかしき島マリン体験と満天の星観察コース】

人生はじめての沖縄、「自然体験活動指導者としては地域の風土に触れる機会を得る意義」という(職場への説明で)正当な理由をとってつけて参加しました。市内の再開発ビル群を横目に、エクスカージョン前日入りのため蒸し暑い午後、人もまばらな高速船に乗り込み30分、島が見えてきました。船を降り立つと、入れ違いにバカンスの装いの長蛇の列が船に乗り込んでいきます。ここで初めてこの島が観光地だということを実感しました。宿泊先の国立沖縄青少年交流の家は、島の高台で海を見下ろす最高のロケーション。視界を遮るものがなく、目に飛び込むのは鮮やかな青の海、そして空、立派な入道雲、潮風が吹き暑さを感じさせない心地よい天候。あたりを見渡すとクチャラ層が発達した肉厚な葉やトゲを身にまとう植物たちや、夜な夜な出現した触角の生えているトンボ!!とか、おけらのようなコガネムシ!!などの昆虫群が、はっきりと南国沖縄にいることを実感させてくれました。同席した大学生たちとも自然観察、新鮮な発見をたくさんした夜となりました。翌日には、一目でそれと分かる指導者の方々と合流、そして交流をはじめ、島を代表するトカシクビーチでのシュノーケリング、手作りの南国お弁当そしてお刺身・マグロジャーキーなどを堪能しました。短期間でしたが、風土を感じるには大変充実した時間でした。

(NPO法人登別自然活動支援組織モンガくらぶ・ふおれすと鉱山 吉元美穂)



## ◆ Bコース【サンゴ植え付け FUN ダイビングツアーコース】

このコースでは、沖縄の海のサンゴについて実際にこの目で見て学び、植付けのお手伝いをさせてもらいました。当日は天候にも恵まれ、ナチュラルブルー星原さんの指導のもと、気持ちよく潜ることが出来ました。この日は計2本潜りましたが、1本目でサンゴの現状視察を行い、サンゴの植付けの方法を指導していただいたあとに、2本目では実際に参加者一人一人が海底でサンゴの植付けを行いました。植付け作業はサンゴの苗をボルトで岩礁に外れないようにつけるという単純な作業でしたが、植え付けた後に網をかぶせ、しっかり成長するまで外部からの様々な影響から守らなければいけないということを教えていただき、海の中の世界でサンゴが育っていくためには一つ一つの小さな思いの積み重ねを大切にしていく必要があることを強く感じました。沖縄の海は何度潜っても飽きることのない様々な魅力を秘めた美しい海ですが、今回のエクスカッションでその海で起こっている問題の現実を目の当たりにして、自然と人との関わりについて今一度自分の考えを深める機会になりました。日常的生活をしていると関わりのない人も多いかもかもしれませんが、海の底に広がる世界にも気持ちを向けて、野外教育という手段を用いて未来につながる取り組みを実施していければと思います。(筑波大学大学院 久米あゆみ)



## ◆ Dコース【沖縄の風と波を満喫！海中道路でウインドサーフィン体験コース】

Dコースは参加者5名、快晴、南東の風2~3メートル、穏やかな風とフラットな海面で和気あいあいとした雰囲気で行われました。上級者にはやや物足りない海のコンディションでしたが、中上級者はフリーでセーリングし、インストラクターからワンポイントアドバイスをもらい、初級者はインストラクターによるレッスンを受ける形式で行われました。実施場所の海中道路は、文字通り海に囲まれたロードパークでどの風向でも安定した風が得られます。また遠浅で安全にレッスンをするには最適の場所です。今回レンタルした用具もそうですが、近年のウインドサーフィン用具は軽くて安定感があり、乗りやすい上に汎用性が高く、いろいろなコンディションに対応できます。マリンスポーツを実施する時には、海のコンディション、実施場所、用具の選択などがその楽しさを左右します。マリンスポーツを実施するのに最適な環境が沖縄にあることが再認識されました。ぜひ実習や野外プログラムで活用してほしいと思います。エクスカッション後に昼食をとったキングタコスのタコライスもボリュームがあり、参加者に好評でした。何度も海に落ち、白い砂と青い海を肌で感じ、本学会大会のテーマでもある美ら島・沖縄の自然を十分に満喫できるエクスカッションでした。(名桜大学 平野貴也)



## ◆ Gコース【わった一島自慢の体験活動と学びのフォーラム in やんばるコース】

うっそうと生い茂るやんばる(山原)の森。温暖で雨が多く、固有な植物群落に、孤立した希少な野生生物が生息している所。その中にある国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」の、環境教育プログラムを7名で体験しました。1日目のナイトハイクでは、五感を研ぎ澄まして自然を感じ、天然記念物ヤンバルクイナの観察を通して野生生物とのつきあい方を考えました。2日目は溪流沿いの自然散策路でガイドウォーク。どのプログラムでも大切なのが、伝える人の存在です。自然環境教育において、自然に気づくキッカケをつくり、自然のメッセージをわかりやすく伝える役が自然解説者やインタープリターです。この人たちには、自然の知識だけでなく、経済や政治、文化や生活など人間にかかわる様々な問題と自然環境のつながりを意識した学びを促す役割があります。コース最後では、インタープリターとして活躍する地元NPOの若者たちとのディスカッションで、野外教育指導者からみたやんばるの活用の可能性や仕事としてのインタープリターについて率直な意見交換をしました。やんばるには、野外教育のノウハウが活かせる自然環境教育プログラムの開発と実践のフィールドとして大きなポテンシャルがあると感じていただけたのではないのでしょうか。(琉球大学 大島順子)

学会では学会連携を進めてきましたが、今大会では、大島先生のコーディネートにより、日本環境教育学会の協力を得た特別エクスカッションが実現しました。私達は最上のガイドウォークとディスカッションを通じ、現場で重なりあう野外教育と環境教育の姿を確認することができました。この場をお借りして、関係のみなさまにお礼申し上げます。

(森林総合研究所多摩森林科学園 大石康彦)

## ●書評

『日比谷公園 100年の矜持に学ぶ』

著者：進士 五十八（日本野外教育学会第4代会長）

（発行所：鹿島出版会／2011年5月20日／223頁／2,500円）

当学会第4代会長として2005年からの長きにわたってその役目をお務め下さった進士先生（東京農業大学名誉教授・前学長）が、この度その役を辞されることとなった。その記念にということで、近刊の自著を二冊、学会に贈呈して下さいました。その内の一冊が本書である。既に紫綬褒章（2007）を受けておられる程のご活躍については学会員ならずとも周知のことであるが、あとがきに「本書は、現在108歳を迎えた日比谷公園の自分史である」と記されている言葉にその意味深さを感じた。

本書は、まず「日本人の“西洋”的なものの“受容”の仕方」から読者の視点をとらえ、日比谷公園をして“The park”と言い切る程の根拠をふんだんに提示し、それらが時間、空間、文化、生活等、多様な基軸を持って明快に解説されている。これは書中に、近代造園の父オルムステッドの言葉としての紹介であるが、「専門家としての能力は（中略）多彩な分野のエキスパートと高いレベルでコミュニケーションできるだけの見識や広範な知識に基づく総合力が必要である」を、まさしくご自身が実現しているものと感銘を受けた。

本書の主体は造園学・環境学であるが、中でも我々野外教育学会員にとっては、「第7章 末田ますの“ネーチャスタディー”」が特に興味深い。児童教育の実践家である末田ます（1886～1953）女史について、恥ずかしながら小生は無知であった。1990年代にN.Y.に於いてO.B.S.が展開したUrban Programを既に当時の日比谷公園で実践していたわけだ。そして日比谷公園誕生100年目となる2003年をパークマネジメント元年と位置付け、「“空間の多様性”をもって（中略）誰をも受け容れ、誰にも好かれる公園」のためのマネジメントを具体的に説いている。

当学会総務委員長として理事会の進行を司ることが多かったが、可能な限りご出席いただいていた進士会長には何度となく窮地をお助けいただいた。また折々にいただいたご挨拶のお言葉にも、前述通りの高い見識が盛り込まれていて大変勉強になった。役職最後となる沖縄学会には、生憎海外出張と重なっているとのご挨拶いただけなかったことが心残りである。

（日本野外教育学会評議員会議長 吉田章）